

「けど」で終わる発話の語用論的研究

－「言い終わり」の「けど」を中心に－

曹英南

要旨

本稿では、自然談話資料を使って「けど」で終わる発話、特に「言い終わり」の「けど」がどのような状況で使われているのか、場面と対人関係を考慮に入れ、語用論的な考察を行った。結果は以下の通りである。「言い終わり」の「けど」で終わる発話は、「発話緩和」「発話補完」「発話断定回避」の三つの談話機能が現われた。三つの機能がどのような状況で使われやすいか、その傾向は以下の通りである。「発話緩和」「発話補完」はくつろいだ状況で使われている傾向があるのに対し「発話断定回避」はあらたまった状況で使われている傾向があることが分かった。

キーワード：発話緩和、発話補完、発話断定回避、場面、対人関係

1.はじめに

文末表現は話し手の態度が現われるところであり、円滑なコミュニケーションのためには実質的情報以上の重要な働きをしていると思われる。特に「けど」「から」「ので」「て」「し」が終助詞的用法で使われることは日本語の話しことばの特徴の一つであり（佐藤 1993:39）、日本語学習者にとって、習得が難しい（山本1989:89、柏崎1993:60）。

そこで本稿では、自然談話資料を使って「けど」¹で終わる発話、特に「言い終わり」の「けど」がどのような状況で使われているのか、場面と対人関係を考慮に入れ、語用論的な考察をする。次の3項目について分析・考察する。(1)「けど」で終わる発話の談話機能を明らかにする。(2)談話機能が場面及び対人関係においてどのように使い分けられているのかを明らかにする。(3)「けど」のバリエーション「けれど」「けども」「けどね」などの使い分けを明らかにする。

2.先行研究及び本稿の位置付け

「けど」で終わる発話を体系的にとらえた研究として佐藤（1993）三原（1995）白川

(1996) がある。

佐藤 (1993) では「が／けど」を「逆接」と「前提」に二分類した上で、「前提」を研究の対象にし、その基本的機能を「暗黙の情報要求」としている。三原 (1995) では「けれども」で終わっている文の基本的機能は「相手伺い用法」であるとし、依頼、要望、断わり、また自分の意見を述べること等、表わされた内容が聞き手に対して何らかの負担をかけてしまう場合に使われることが多いとしている。白川 (1996) では「けど」で終わる文を「省略」「言い残し」「言い終わり」の三つに分類し、その中の「言い終わり」の「けど」を研究対象にした。その基本的機能は「聞き手に条件（聞き手が何かをするための情報）を提示すること」(p16) であるとしている。

いずれの先行研究においてもシナリオ集などを使い、「けど」で終わる発話の基本的な機能をとらえていることにとどまっている。本稿においては、自然談話資料をデータとして言語使用に焦点をあて、場面と対人関係を考慮に入れた語用論的アプローチをする。

三原 (1995) では「けど」「が」は「けれども」のバリエーションの一つであり、それらは意味的な違いではなく、待遇的な違いがあるように思われるとしている。そこで本稿では「けど」のバリエーションにどのようなものがあるか調べ、それらがどのような対人関係において使い分けられているのか、自然談話資料をデータとして検証することを目指す。

次は分析対象の「けど」で終わる発話であるが、先行研究では「けど」で終わる発話の後に後半の存在を仮定しているが、後半そのものの範囲が研究者によって異なっているという問題がある。例1)のような「けど」で終わる発話を白川 (1996) は「～してください」とか「～ください」のような後半がそもそもないととらえ、佐藤 (1993) は話し手が自ら文の後半を言い残しているとしている。

例1) S: あの・・・三鷹さん私・・・アパートに電話したいんですけど

H: は? どうしてですか? 子供じゃあるまいし。

(白川1996:14)

本稿では3-2で述べるように後半が省略されているかどうかという判断ではなく、話者交替がおきているかどうかを基準として、話者交替がおきているとき、その先行発話の「けど」で終わる発話を分析対象とする。

3. 調査の概要

3-1. 分析資料

現代日本語研究会（1997）の「自然談話録音資料」²（以下、談話資料と称する。）を使用する。談話資料には時間にすると約9時間12分で、多数の発話があり、場面と対人関係が提示されている。会話を文字化した資料であるため、実際の日本人の会話の実態調査と語用論的な研究をするには有用な資料である。

3-2. 分析対象

「けど」で終わる発話の後、話者が交替し、実質的な発話が始まる場合、その先行発話の「けど」で終わる発話を分析対象にする。実質的な発話は、杉戸(1987:88-89)によれば、あいづち的な発話以外の発話であり、なんらかの実質的な内容を表わす言語形式を含み、判断、説明、質問回答、要求など事実の叙述や聞き手へのはたらきかけをする発話を言う。

例えば、以下の例2)は2Sから4Sにかけての「あ、やっぱ時期選ばなきゃだめなのかな、とか思っちゃうけど」の後、5Hの実質的な発話で話者が交替している。2Sから4Sにかけての発話を本稿の分析対象とする。

例2)1H：ピーチ行ったんだけどー、曇っちゃってー、もういられなくてー。

2S：あ、やっぱ時期選ばなきゃだめなのかな、

3H：ん。

4S：とか思っちゃうけど。

5H：まあ、ワイキキにいるぶんはねー、ま、ハワイはさーそれに買い物とかがあるから、買い物好きな人はー、別にいんでしょ。

3-3. 「言い終わり」の「けど」の定義

話者の「けど」で終わる発話を聞き、話の前後関係から何かを補って考えなくても話者の発話内容が分かるものを「言い終わり」の「けど」とする。「言い終わり」の「けど」かどうかを判断する際、「けど」がなくても、話者の実質的情報が伝わっているかどうかという点を基準とした。

例2)の4Sは「言い終わり」の「けど」である。SとHは同じ会社で働いている同僚であり、親しい関係にある。Hがハワイに行った話をする場面であるが、2Sと4Sにかけての「時期選ばなきゃだめなのかなとか思っちゃうけど」という発話に対し、5Hの後半で「ハワ

イはさーそれに買いもんとかがあるから、買い物が好きな人は一、別にいんでしょ」と否定反応している。すなわち4Sで「けど」がなくても、2Sから4Sにかけての実質的情報は十分伝わっていることになる。

「言い終わり」ではない「けど」は以下の例である。食事をする場面であるが、2Sの「おいしいけど」の「けど」には「おいしい」と言えない好ましくない何らかの状況があることが暗示されている。これはHの「正直なところ」という情報要求の発話と後のSの「うーん、わかんないなあ」という発話から裏付けられる。すなわち「けど」に何らかの暗示があり、話の前後関係から暗示の部分の補って考えなければならないものを「言い終わり」ではない「けど」とする。

例3)1H：どう↑、おいしい↑、いまいち↑

2S：おいしいけど

3H：なに。

4S：え↑

5H：正直なところ。

6S：正直なところ↑

7H：うん。

8S：うーん、わかんないなあ。

4. 「言い終わり」の「けど」の談話機能

「言い終わり」の「けど」がどのような状況で現われるか、帰納的な方法により、機能づけを試みた。その結果「発話緩和」「発話補完」「発話断定回避」の三つの談話機能が抽出できた。以下各々の談話機能について例を含めて述べる。

4-1. 「発話緩和」：聞き手の感情を害するような発話を和らげる機能であり、聞き手または第3者の発話に対し否定反応をしたり、聞き手の発話を修正したりする場合に見られる。

a. 聞き手または第3者の発話に対し、否定反応する場合。

例4)1H：でもきのう2人、編集経験があるって。

2S：うん。

3H：ゆってるから。

4S：うん。

5H：そんな悪い人じゃないし。

6S：でもほかに、ほかに行ってもおなじことゆってるんじゃないの、ってゆう気がとてもするんだけど。

7H：うん、それはあるかもしれない。

例4) は会社の面接を受けに来た人について打ち合わせをする場面である。SとHは同じ職場で働いている同僚であり、親しい関係にある。Hは面接を受けに来た人たちに対し、1H、3H、5Hで「編集経験もあり、悪い人ではない」と肯定的な評価をする。それに対し、Sは6Sで「編集経験があると他に行ってもおなじことゆってるという気がする」と否定的な評価をする。6Sは、SがHの肯定的な発話に賛成できないため、反対意見を表明する発話である。相手の発話に対し、反対意見を表明するというのは相手のフェイスをおびやかす可能性があることから、Sは6Sで「けど」を付けることにより、発話の力を和らげるようにしていると言える。

b.聞き手の発話を聞き、修正する場合。

例5)1H：おいしそうだね。

2S：客がすってね

3H：ふーん。(間)みずからかけるんだ。

4S：やー、みずから、かけんのはお店の人だけだね。

5H：じゃ、客がするんでしょ↑

例5) はSが前日テレビで放送された屋台の話をする場面である。SとHは同じ職場で働いている同僚であり、かなり親しい関係にある。Sの「屋台で白ごまを客がする」という話に対し、Hは2Sの発話の続きを推測し、3Hで「みずからかけるんだ」と言うが、その推測は間違っている。それをSは4Sで「やー、みずから、かけんのはお店の人だけだね」とHの勘違いを修正している。相手の発話を修正するというのは、相手の感情を害するような恐れがあるため、「けど」を付けることにより、和らげるようにしていると言える。

4-2. 「発話補完」：聞き手に正しく理解してもらうため、または言い足りないことを言うため、a.自己修正³⁾、b.補足などの会話の整理または再構成する機能である。自己修正というのは話者自身の話の修正である。

a.自己修正する場合

例6) 1S：あの、チケットどうするかって★ゆう電話。

2H：→ふーん。←

3S：わたしすっかり忘れてたよーとかいって、元気だなーとか思って、で、次の日会社行ったら、はりきって仕事してたよ、はりきっていないかもしれないけど。

4O：わたしの心の叫びが通じたのねー。

例6) はSとHの同僚のことを話す場面である。SとHは普通の関係にある。Sは同僚がお酒を飲んだにもかかわらず、次の日ははりきって仕事してたと言ったあと、3Sで、はりきっていないかもしれないと修正する時に「けど」を付けている。「はりきって仕事してた」と言ったあと、「はりきっていないかもしれない」と修正したのは、HにS自身の推測であることを理解してもらうためであろう。3Sの「けど」で言い終わる発話は正しく理解してもらうため付け加えた形の自己修正と言える。

b.補足の場合

例7) 1H：→それにしちゃあ大事（おおごと）じゃないね。←、眼球↑ 眼球↑

2S：眼球よ、白いところからだけ。

3H：にじむんじゃあなく、にじむの↑

4S：でちゃったの、あのねー、切っちゃったの、こうゆうのでね、ベニヤで。

例7) は学生が数人の先生に友達目から血が出たことを知らせる場面である。HとSは同じ職場（学校）で働いている同僚であり、疎の関係にある。眼球から血が出たことに関して知っているSが1Hの「眼球から血が出たのか」という質問に対し肯定の答えをした後、「白いところからだけ」と付け加える形の補足をする。これはSが言いたりないことを付け加えた、またはHに正しく理解してもらうために付け加えた形の補足と言える。

4-3. 「発話断定回避」：会話が途切れるような感じを防ぎ、スムーズに運ぶようにする機能、または不確かな情報であるという含みをもたせるように断定を回避する機能である。聞き手の情報要求に対し情報提供する場合に多く現われた。

例8)1H：あ、そっかそっか。

2S：あの、うくお金、ほらお昼代引くと2万2千円しか残らないからー、足りない分はこっちから1万円ぐらい出させるかなー。

3H：で、先生のお礼はー、ご、これだー、3万↑

4S：うー、いつもいちんち来てもらう時は3万今まで払ってますけどー。

5H：3万ですよね↑

例8)は場所代、食事代などお金の予算について話をする場面である。Hから先生のお礼は3万なのかと聞かれ、いつも一日来てもらう時は3万円払っていると答える時、「けど」をつけている。この場合、「けど」をつけることにより会話が途切れるような感じを防ぎ、スムーズに運ぶような作用をもたらしていると言えよう。

5. 語用論的観点からみた「言い終わり」の「けど」

会話における言語表現は、場面、対人関係などの様々な要素が絡み合い、使い分けられている。日本語学習者の実際の言語運用のためには、どのような場面あるいは対人関係において「けど」で終わる発話が使われているのかまで示す必要があると思われる。

5-1ではどのような場面において「けど」で終わる発話が使われているのかを分析する。しかし場面と言っても改まりの度合が様々であり、会議のような場面でも職場によってはかなり格式ばったところとあまり格式ばらないところが存在する。そこで場面という要素のみではなく、対人関係という要素をも考慮に入れ、より総合的に語用論的な考察をする必要があると思われる。5-2ではどのような対人関係において「けど」で終わる発話が使われているのか、言語形式の観点から分析を行う。さらに「けど」のバリエーションである「けどね」「けどさ」「けども」「けれど」「けれども」がどのような対人関係において使われているのかについて分析を行う。

5-1. 場面からみた「言い終わり」の「けど」

「言い終わり」の「けど」がどのような場面で使われているのか、使用頻度という観点

から、三つの談話機能別に、その傾向を明らかにする。

談話資料においては「大会議」「仕事の話」「打ち合わせ」「休憩時雑談」など様々な場面が提示されているが、それらは基本レベルとして次のように二分類が可能である。

(1) 公的な場面：大会議、仕事の話、打ち合わせ、小会議、院生の指導、相談

(2) 私的な場面：休憩時雑談、昼食時雑談、雑談、始業前雑談

4で考察した「けど」で終わる発話の談話機能が、公的な場面と私的な場面において、どのような割合で現われているか、以下表1に示す。

表1：談話機能の場面による使い分け

| 談話機能 \ 場面 | 公的な場面 | | 私的な場面 | | 合計 |
|-----------|-------|---------|-------|---------|----|
| | 頻度 | 割合 | 頻度 | 割合 | |
| 「発話緩和」 | 8 | (0.16%) | 8 | (0.13%) | 16 |
| 「発話補完」 | 3 | (0.06%) | 19 | (0.32%) | 22 |
| 「発話断定回避」 | 16 | (0.33%) | 12 | (0.2%) | 28 |

▲[%]は談話資料全体の発話における、場面（公的な場面、私的な場面）の総発話数に対する「けど」で終わる発話の割合である。公的な場面の総発話数は4861発話であり、私的な場面の総発話数は6002発話である。

上記の表1から次のことが分かる。「発話緩和」は公的な場面で0.16%、私的な場面で0.13%の割合を占めており、公的な場面と私的な場面との間でほとんど差はない。「発話補完」は公的な場面で0.06%、私的な場面で0.32%になっており、私的な場面における割合が多く占めている。私的な場面では、公的な場面のように順序よく話すということより、まず話したいことから言うということが十分許容される場面であると思われる。そのため後から付け加える形の発話補完が私的な場面で多く使われているのではないかとと思われる。「発話断定回避」は公的な場面で0.33%、私的な場面で0.2%で、公的な場面で若干多く占めている。

これらのことから言えることは、「発話補完」は私的な場面で多く使われているが、「発話断定回避」は公的な場面で若干多く使われているということである。すなわち「発話補完」「発話断定回避」は場面に応じて使い分けられていると考えられる。それに対し「発話緩和」は場面に応じた使い分けがないように考えられる。「けど」で終わる発話がどの

ような状況で使われているのか、その傾向を調べるためには場面のみではなく、対人関係をも考慮に入れる必要があると思われる。それは言語使用において、人々はどのような場面であるか、どのような人に話しているか、それらを総合して使い分けしているからである。

5-2.対人関係からみた「言い終わり」の「けど」

「言い終わり」の「けど」がどのような対人関係で使われているのか、さらに「けど」のバリエーションである「けども」「けれども」「けれど」「けどね」「けどさ」の使い分けについて、使用頻度という観点から三つの談話機能別にその傾向を明らかにする。

談話資料においては様々な対人関係が提示されているが、それらは言語形式という観点から基本レベルとして次のように二分類が可能である。

(1) 遠慮が必要な関係：敬体を使用する場合

(2) 遠慮が必要でない関係：常体を使用する場合

4で考察した「けど」で終わる発話の談話機能が、遠慮が必要な関係と遠慮が必要でない関係において、どのような割合で現われているか、さらに「けど」のバリエーションの使い分けについて、以下表2に示す。

表2：談話機能の対人関係における使い分け及び「けど」のバリエーション

| 談話機能 | 対人関係/バリエーション | バリエーション | | | | | | 頻度 | 割合 |
|--------|--------------|---------|-----|-----|-----|-----|------|----|-------|
| | | けど | けどね | けどさ | けども | けれど | けれども | | |
| 発話緩和 | 遠慮が必要な関係 | 2 | 1 | | | 2 | | 5 | 31.3% |
| | 遠慮が必要でない関係 | 7 | 3 | | 1 | | | 11 | 68.8% |
| 発話補完 | 遠慮が必要な関係 | 2 | 3 | | | 1 | | 6 | 27.3% |
| | 遠慮が必要でない関係 | 10 | 4 | 2 | | | | 16 | 72.7% |
| 発話断定回避 | 遠慮が必要な関係 | 16 | 1 | | 1 | 1 | 1 | 20 | 71.4% |
| | 遠慮が必要でない関係 | 4 | 3 | | | | 1 | 8 | 28.6% |
| 合計 | | 41 | 15 | 2 | 2 | 4 | 2 | 66 | |

▲割合の合計は、四捨五入の関係で、100にならない場合もあるが、便宜上、100と記した。

上記の表2から談話機能の対人関係における使い分け及び「けど」のバリエーションについて次のことが分かる。

まず談話機能の対人関係における使い分けであるが、「発話緩和」は遠慮が必要な関係より、遠慮が必要でない関係で多く使われている。「発話緩和」は相手のフェイスをおかさような内容を緩和する機能をもっているため、一般的にそのような内容を遠慮が必要な関係ではできる限り避けるような傾向があるのではないかと思われる。「発話補完」は「発話緩和」と同様に遠慮が必要でない関係で多く使われている。先に考察した私的な場面で多く使われるという結果も含めて言えば、「発話補完」はくつろいだ状況で現われる傾向があるということである。「発話断定回避」は「発話緩和」「発話補完」とは逆に、遠慮が必要な関係で使われている。先に考察した公的な場面で若干多く使われているという結果がさらに裏付けられている。すなわち「発話断定回避」はあらたまり度の高い状況で現われる傾向がある。

次は「けど」のバリエーションの使い分けであるが、まず「けど」は遠慮が必要な関係で20発話、遠慮が必要でない関係で21発話で対人関係に関わらず、使われている。「けどね」は遠慮が必要な関係で5発話、遠慮が必要でない関係で10発話で、遠慮が必要でない関係で多く使われている。宇佐美(1997)では「ね」のコミュニケーションの機能の一つとして注意喚起を取り上げているが、これは「話し手が聞き手を自分の話題に引き込むために、自分の発話を強調したり、相手の注意を喚起するもの」(p250)であると、「多用すると、相手や時と場合によっては、失礼になってしまう危険性がある」(p251)とある。「けどね」の「ね」は上記の注意喚起の機能であり、多用してもあまり失礼だと思われる遠慮が必要でない関係で多く使われていると思われる。「けどさ」も「けどね」と同様に遠慮が必要でない関係で使われている。Okazaki(1994)では日本語の終助詞はインタアクションにおいて話者の態度を表すとし、特に「さ」は明確な主張を表すとしている。従って、「けどさ」には明確な主張の態度を表す「さ」が付いているため、遠慮が必要でない関係で使われているのではないかと思われる。「けれど」は遠慮が必要な関係で使われている傾向がある。

6. 終わりに

従来「言い終わり」の「けど」は基本的機能に焦点があてられていた。本稿においては実際の言語使用の究明を目的として語用論的アプローチという観点から談話機能をとらえ

た。その結果、「言い終わり」の「けど」には次の三機能があることが分かった。

- (1)聞き手の感情を害するような発話を和らげる「発話緩和」
- (2)聞き手に正しく理解してもらうため、または言い足りないことを言うため、会話を整理または再構成する「発話補完」
- (3)会話が途切れるような感じを防いだり、不確かな情報であるという含みをもたせるために断定を回避する「発話断定回避」

上記の三機能が場面（公的な場面／私的な場面）及び対人関係（遠慮が必要な関係／遠慮が必要でない関係）においてどのように使い分けられているのか明らかにした。その結果、「発話緩和」「発話補完」はくつろいだ状況で使われている傾向があるのに対し「発話断定回避」はあらたまった状況で使われている傾向があることが分かった。

さらに「けど」のバリエーションの使い分けであるが、「けど」は対人関係に関わらず、多く使われている。「けどね」「けどさ」は遠慮が必要でない関係で使われている傾向があるのに対し「けれど」は遠慮が必要な関係で使われている傾向があることが分かった。

今後の課題として、自然の会話データに基づき「て」「から」「し」「ので」で終わる発話がどのような状況で使われているのか、語用論的な観点から明らかにし、日本語教育の現場で生かす方法を考えたい。

[注]

- 1.「けれども」「けども」「けれど」「けどね」「けどさ」を代表させ、「けど」と称する。
- 2.この資料の調査は1993年9月から11月にかけて、首都圏で行ったものであり、職場で会議打ち合わせなどのフォーマルな場面と休憩時間のインフォーマルな場面での会話を録音してもらい、文字化したものである。職場は比較的規模の小さい企業、教職関係、役所、研究所などであり、大体20代から60代の人の会話がもりこまれており、性についてもいろいろな組み合わせがある。

本稿においての文字化方法は以下の通りである。

- (1)発話の単位：話者が交替するたびに改行する。発話者の区別のために、発話の前にS、H、Oの記号を記した。
- (2)聞き取り不明の箇所は「#」で示す。
- (3)発話の途中で次の話者の発話が始まった場合、次の話者の発話が始まった時点

「★」で示す。また、前の話者の発話に重なった部分は始まりを「→」、終わりを「←」で示す。

(4)↑：上昇調

3. Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) の修正の定義と種類を参考した。

参考文献

- 野元菊雄(1987)『日本語教育映画基礎編総合文型表』国立国語研究所
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相－座談資料の分析』国立国語研究所
報告92 三省堂
- 山本富美子(1989)「待遇表現としての文体」『日本語教育』69号
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に」『日本語教育』79号
- 佐藤勢紀子(1993)「言いさし『が／けど』の機能－ビデオ教材の分析を通じて－」『東北大学留学生センター紀要』第1号
- 三原嘉子(1995)「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第2号
- 白川博之(1996)「『けど』で終わる文」『広島大学日本語学科紀要』6号
- 熊谷智子(1997)「はたらきかけのやりとりとしての会話」『対話と知 談話の認知科学入門』新曜社
- 現代日本語研究会(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 宇佐美まゆみ(1997)「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- Sacks, Harvey, E. A. Schegloff and G. Jefferson. 1974. A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language* 50.4
- Okazaki, Shoko. 1994 *Ellipsis in Japanese Conversational Discourse* UMI Dissertation Services